かつて交わした約束と

こーしょー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かつて交わした約束と

【Ｎコード】

Ｎ８０７２Ａ

【作者名】

こーしょー

【あらすじ】

毎年八月三十一日にいつもの公園で――一年にたった一日だけ会う約束をした男女のラブストーリーです。感想などいただけたら幸いです。

#1（前書き）

奥華子さんの「ガーネット」という曲を聴いていたら突然頭に浮かんできたお話です。歌詞と内容は全然関係ないんですが…。五話程度で完結させる予定ですので、どうぞよろしくお願いします。

#1

――毎年、今日の夕方に、いつもの公園に会いに来て。約束。

別れ際に、幼馴染の少女が口にした言葉。

それから五年の月日が流れた。

青年は約束を守っている。

約束の日。

八月三一日の夕方。

青年は去年と同じように、入り口に設置された車止めを跨ぎ越して園内に入る。

何度も重ね塗りされたペンキの剥げた箇所から、赤茶けた錆を覗かせる遊具達。

子供が忘れていったのか、プラスチック製のスコップが刺さったままになった小さな砂場。

色とりどりの花が咲き誇る花壇に囲まれた公園は、幼い頃の思い出より、幾分か小さくなっているような錯覚を覚えさせる。

辺りを見渡すまでも無く、青年は目当ての少女を見つけることが出来た。

背中で手を組んで、こちらに背を向けるワンピース姿の少女。

ふと、青年の中に悪戯心が芽生えた。

足音を極力立てないようにそっと近付いていき、

「お待たせっ！」

突然の大声に驚いたのか、少女はびくりと方を震わせた。

「ちょ、ちょっと……驚かさないでよ！」

「ははっ、悪い悪い……ってこんなやり取り去年もやってた気がするな」

「そ、そう言えばそうかも……」

「学習しろよなー全く」

「むー」

からかうような青年の口調に、頬を膨らませる少女。年齢不相応なその仕草も、少女には似合っていた。

仕切り直し、といった感じに少女はえへん、と小さく咳払いをすると、

「……えと、とりあえずお久しぶり」

「おう、久しぶり」

一年ぶりになる、少女の笑顔と挨拶。

それに片手を上げて笑顔で応える青年。

そんな青年をまじまじと見つめる少女。

「？　何だよ？」

「……なんだか随分痩せたんじゃない？　体つきがこう、何て言うか……ほっそりした感じ」

「ん？　……あーあれだ。運動系のサークル入ったからじゃね？」

「なるほど。それで？　大学生活二年目はどんな感じ？」

「結構楽しいかな。授業は専門教科入ってきたから難しいけども面白いし、友達も何人か出来た」

「一人暮らしには慣れた？」

「どうにかね。……あーでも相変わらず家事がめんどい。どうしてもサボりがちになる」

「駄目じゃない。ご飯は？　ちゃんと三食食べてる？」

「んー……ノーコメントで」

困ったような笑みを浮かべる青年を見て、少女は呆れたようにため息を吐く。

「だからそんなガリガリになっちゃうのよ。そのうちどっかの道端で倒れちゃっても知らないからね」

「ハイハイ以後気ヲツケマス」

「気持ちがこもってなーい！」

「分かった分かったホントに気を付けるって！　……言う事がうちの母さんそっくりになってきたな」

「今何か言ったかしら？」

「いえいえ何も言っておりませんですともはい」

「全くもう……」

それから青年と少女は、人気の無い公園のベンチに隣り合って座り、去年と同じように、取り留めの無い話をした。

基本的に青年が喋り、少女はそれに相槌を打つだけだったが、少女の顔には嬉しそうな微笑が浮かんでいた。

ベンチの傍に設置された水銀灯に明かりが灯った。
遠くの山から聞こえてきていたヒグラシの涼やかな鳴き声もいつの間にか途絶え、二人の周りを夜の静寂が包んでいる。
「……あ、そろそろ時間だ」
少女の言葉に青年はポケットから携帯電話を取り出し、
「あ……ったく。ほんとアレだな。楽しい時間は過ぎんのが早いな」
青年の言葉に、少女は青年の顔を覗き込み、
「それは私と話してる時間が楽しいって言ってくれてるのかな？」
「んー……ま、そう受け取ってくれても構わないかな？」
おどけたような、とぼけたような青年の言葉に微笑む少女の顔は、本当に嬉しそうだった。
「ねぇ？」
「ん？」
「今、幸せ？」
「んー……まだよく分からん」

「そっか……うん、それじゃまた来年、だね」

「おう、また来年来るよ」

「約束」

「あぁ、約束だ」

そうして二人は再開を誓い、別れた。

少女と青年が会えるのは、一年のうち、ほんの少しの間だけ。

青年も少女も、それ以外の日にも会いたいと言い出すことは無かった。

一年に一日だけ。

それが、二人が交わした約束だったから。

#2

月日はゆっくりと、だが確実に流れ、青年は男へと成長した。

初めて約束した日から十三年が過ぎても、男は約束を守っている。

「実はさ……俺、彼女が出来た」

古びたベンチに腰掛け、うなだれた男が、申し訳無さそうに言った。

「……うん。よかったじゃない。おめでとう」

男と同様に歳を重ね、かつて少女だった女が、それでも昔と変わらない微笑みを浮かべたまま、言った。

予想外の言葉に、男は顔を上げる。

その日、男は罵られる覚悟をしていた。

彼女にはその資格があると思ったから。

「……怒らないのか？」

「どうして怒るのよ？」

「いや、だってその……」

女の目に映る、口ごもる男のその姿に、記憶の中の、彼が青年だった頃の面影が重なる。

女は苦笑しながら、

「……んー。そりゃまぁ、少しは悲しいよ？」

「じゃあどうして？」

「それでもさ、君はこうして、去年と同じように今日、ここに、私に会いに来てくれた。それだけで私は満足」

「……」

「忘れないで。君の心の中に、どんなに小さくてもいいから、私っていう存在のためのスペースがあって、それでいて君が幸せだったら私はそれ以上何も望まない。それで私は充分幸せだから」

「……ありがとう……ごめん」

「謝るかお礼言うかどっちかにしてよね。……それにしても驚いた」

「？　何が？」

「私以外に君みたいな男、好きになるような物好きがいるとは思わなかった」

「う……やっぱ怒ってんだろ？」

「冗談よ冗談。それで？　どうしてその子と付き合う事にしたの？」
「……うちの会社の後輩でさ。色々面倒見てるうちに仲良くなって、そんであっちから告白してきたんだけど、最初は断ったんだ」
「どうして？」
「そりゃ俺には昔からずっと好きな人がいるから」
さも当然のごとく言ってのけた男の言葉に、女の頬が真っ赤に染まった。
「……まっ、真顔でそんな恥ずかしい事言わないでよ！」
「お前だってさっきかなり恥ずかしい事言ってたと思うけどな……」
「うー……え、えっと、最初はって事は、また告白されたって事よね？」
「あ、あぁ。その後も何度か……あーっと……一……二ぃ……三……四……うん、四回告白された」
「……凄い執念」
「ん、まぁな……俺も流石にうんざりしちまって、そいで五回目の告白の時に言ったんだ。この先君が俺に何度告白してきたって俺の気持ちは絶対君には傾かない、って」
「……ちょっとした死刑宣告みたいなものねそれ。それで彼女は何て？」

「それでも構わない、ってさ」

「……え？」

「私の事好きになってくれなくてもいいですから、私が一番じゃなくたっていいですから、お願いだから傍にいさせて下さい、だって」

「……それはそれは」

「もう必死な感じでさ。そこまで言われたら断れなくてよ……」

「でもそれってよく考えたら自己中なお願いよね。君の意志は関係無いって言われたのと同じでしょ？」

「いや、まぁそうなんだけどさ……」

「うーん……て言うかそもそも君ってそこまで言われる程の人間かなぁ……実はちょっと脚色しちゃってるんじゃないの？」

「……」

「もう、だから冗談だってば。じょ、う、だ、ん。毎年毎年私がからかわれてるんだから、たまには私が君の事からかったっていいじゃない……ってもうそろそろ時間ね」

「もうそんな時間かよ？　……あーあ。次会えんのは一年後か」

「あ、そうだ。来年来る時はその子の写真でも持ってきてよ。別れてなかったらでいいから」

「縁起でもない事言うなよな……付き合い始めてまだ二ヶ月ちょいなんだから」

本当に困り果てた感じのその口ぶりにようやく満足したのか、女は悪戯っぽい微笑を浮かべ、

「ごめんごめん。でもそういう子は放しちゃ駄目よ。君みたいな男の事真っ直ぐに想ってくれてる稀有な女の子なんだから」

「う……肝に銘じとくよ」

「それじゃ来年は写真よろしく。私よりブサイクだったら流石に傷ついちゃうよ？」

「はは、覚えとく」

「……ねぇ」

「はいはい？」

「今、幸せ？」

「んー……幸せ、なのかな？」

「そっか……うん、それじゃ約束」

「おう、約束だ」

そうして二人は再会を誓い、別れた。

お互いがお互いの事を好きだと分かっているのに。

二人はそれを形にしようとしない。

それが男と女の間に存在している、暗黙の了解であるかのように。

#3

「――それじゃ行ってくるよ。今日は帰り遅くなるし、先に寝ててくれて構わないから」

「分かりました。それじゃ行ってらっしゃい。あなた」

休日だというのに、暑苦しいスーツを着込んだ夫の後ろ姿を笑顔で見送った妻は、玄関の扉が閉まると同時に、小さなため息を吐いた。

妻が男と出会ってから、もう十六年が経つ。

執拗なまでのアタックが功を奏し、付き合い始めてから三年後に、男からの突然のプロポーズ。

戸惑いながらもそれを受け入れ、籍を入れてから三年後に長女が、更にその二年後に長男が誕生。

そして現在、長女は十歳、長男は八歳。

決して裕福とは言えないにしても、一家四人、そこそこ幸せに暮らしてきた。

男は、子供達にとって優しい父親であり、妻にとっても優しい夫

だった。

しかし妻は気付いていた。

夫は自分や、子供達を見てくれているようで、実は見ていない。

初めて出会った頃からずっと変わらず、彼の心の中にはいつも別の女性がいるという事を。

八月三十一日。

その日は毎年、例え平日で仕事があったとしても、夫は会社を休んでででも、どこかへ出かけていく。

幼馴染との大事な約束なんだと、夫は言っていた。

――俺の事そんなに想ってくれてるってのは嬉しいんだ。だけど、本当に申し訳ないけど、この先君が俺に何度告白してきたって俺の気持ちは絶対君には傾かない。

五度目の告白の時に言われた言葉。

あの時女は、それでも構わないと思った。

自分に好意を寄せてくれていなくてもいい。
ただこの人の傍にいれるだけで、きっと自分は幸せになれると、根拠は無くてもそう思っていた。
それでも、妻の心の隅には、いつかはその目が自分の事を見てくれるのではないか、という微かな期待が確かにあった。

「ねーねーおかーさん」
いつの間にか物思いの耽っていた妻は、娘にエプロンの裾を引っ張られて我に返った。
「ん？　どうかした？」
慌てて笑顔を取り繕い、娘の身長に合わせて身を屈めた。
「おとーさんはどこにでかけてったの？」
「お父さんはね、大事な人に会いに行ったの」
「だいじなひとって……おばーちゃんとおじーちゃん？」
「ううん、昔からの幼馴染の人なんだって」
「その人っておとーさんのウワキアイテなの？」
「……は、はぁ？」

十歳の娘の口から出てくるとは思えないその発言に、妻は思わず素っ頓狂な声をあげた。

「あ、あなた……そんな言葉どこで覚えてきたのよ？」

「クラスの子が言ってた」

「あ……そう……」

妻が娘達と同じくらいの年齢の頃には、「浮気」や「不倫」などという言葉の意味は知らなかった筈である。

最近の子供は進んでいる、という言葉の意味を実感すると共に離婚や再婚が珍しくもなくなってきた現代社会が、子供達の世代にも影響を及ぼし始めているのだと、妻は思い知らされたような気がした。

「おとーさんウワキしてるの？　おかーさん、おとーさんとリコンしちゃうの……？」

家族が離れ離れになるのだろうか、という不安を湛えた眼差しで見つめてくる娘に苦笑しながら、

「……大丈夫。うちのお父さんはそういう事するような人じゃないから。だからあなたが心配しなくてもいいのよ？」

「……うん、わかった！」

「ん、いい子ね」

母親の言葉に安心したのか、元気に大きく頷いた娘の髪をくしゃりと撫でる。

「……あ。それと、あんまり人前でそういうこと言っちゃ駄目よ？」

「どうして？」

「どうしてって……と、とにかく駄目なものは駄目なの！　ほら、今からお部屋に掃除機かけるから、終わるまで弟とお外で遊んでらっしゃい！」

「はーい」

「行ってきまーすっ！」

「車に気をつけなさいよー？」

「わかってるーっ！」

弟の手を引いて玄関から出て行く娘を見送り、妻はふと、自分の左手を顔の前に掲げた。

その薬指の根元では、夫からプレゼントされた、少しくすんだ色をした銀の結婚指輪が、日光を浴びて光っている。

妻は思う。

あの時、彼に告白したのは正しかったと。

優しくて頼りになる夫が出来たから。

二人の可愛い、愛する子供達がいるから。

そこそこに裕福で、とても温かい家庭があるから。

自分はちゃんと幸せになれたから。

しかし同時に考える。

じゃあ彼は、夫は今、幸せなんだろうか？

その答えを夫から訊く勇気は、妻には無かった。

#4

「……先生、私ぁ、昔からどうも回りくどいのは嫌いな性分でしてね」

とある病院の診察室。

先程からずっと難しい表情を浮かべ、現像されたレントゲン写真を無言で見つめている医師に、男は言った。

顔に刻まれた幾筋もの深い皺。

真っ白になった髪の毛。

脇に立てかけられた杖。

丸くなった背中。

血管が浮き出る程に痩せ細り、骨ばった腕。

それら全てが、彼という人間が過ごしてきた年月の長さを表している。

「単刀直入に言ってくれて構いません。私の余命はあとどれくらいなんですか？」

長い沈黙の後、医者はため息を吐き、

「……恐らくはもって半年、といったところです」

「そう、ですか……」

男の声色から、悲壮感といったものは感じ取れない。むしろその顔には穏やかな微笑みすら浮かんでいる。

「しかしそれは今の状態のままであれば、の話です。治療次第ではもっと伸ばす事も恐らく可能かと」

「ふむ……」

「もしあなたが治療による延命を望むのであれば、私は全力を尽くしてあなたをサポートします。ですが治療を受けるかどうか、決めるのはあなた自身です。……どうしますか？」

男の事を真っ直ぐに見据える医師の目は、利益などは関係無くただ純粋に人の命を救いたい、という使命に燃えていた。

「……今日は確か四月の……二二日でしたかな？」

短い沈黙の後に男の口から出てきた言葉は、全く見当違いのものだった。

「え、えぇそうですが……それが何か？」

戸惑いながらもその問いに応じる医師。

「あぁ、いや念のための確認という奴でしてね。お気になさらず」

「は、はぁ……？」

「治療の方ですが……先生にゃ大変申し訳ないが、私はこのまま下手に足掻かずに余生を過ごそうと思います」
「……分かりました」

その声色は平静を装おうとしているものの、残念であるという心情が隠しきれていない辺りは、まだまだ医師としては未熟な証拠だろう。

腕に抱えていた上着を羽織りながら、男は改めて目の前にすわる医師を観察する。

年齢は、どんなに高く見積もったとしても二十台後半、といったところだろうか。

門外漢の男に、医師の平均年齢などというものはよく分からないが、
それでも医師としては比較的若い部類に入るだろう。

「……私の顔に何か顔に付いてますか？」

視線に気付いた医師が問いかける。

「あ、あぁ、いや、気にせんで下さい」

――この人は将来いい医者になって、たくさんの命を救うだろうな。

そんな奇妙な確信が、男の中に芽生えた。

まぁこんな老人に太鼓判を押されたところで嬉しくも何とも無いだろうが、と苦笑しながら
「どっこいしょ」という小さな掛け声と共に丸椅子から立ち上がり、
「さて、それじゃ、ありがとうございました」
「……気が変わられましたら、またいつでもいらして下さい。それではお大事に」
「えぇ、それでは」
一礼して、男は診察室から出た。

バス停のベンチに腰掛けて帰りのバスを待ちながら、男は同居中の娘夫婦にどう切り出そうか考えていた。

事の発端は数日前だった。
日課である散歩の途中に突然激しい眩暈に襲われ、たまらずその場に蹲ってしまった。
その時は幸いと言うべきか、人通りが少なかったために、救急車を呼ぶような大事にはならず、眩暈も数分で治まったものの、嫌な予感を感じた男は、娘に散歩と偽ってこうして病院に来ていたのだった。
「……あと半年、か」

いよいよ間近に死の影が迫って来たのだと知っても、男の心中に不思議と恐怖は湧いてこなかった。

何故だろうかと考えてみると、答えはすぐに見付かった。

男にはもうやり残した事が無いのだ。

二人の子供達も無事に独り立ちしていき、その孫達も今では結婚して、初曾孫の顔まで見れた。

親の死に目にも会えた。

数十年勤めた会社も、無事に定年を迎える事が出来た。

長年連れ添った伴侶も、数年前に旅立っていった。

やりたい事もやり残した事も、もう男には無かった。

――最後にもう一度だけ、彼女に会いたい。

その一つの願いを除いては。

#5（前書き）

これで最終回となります。

#5

一台の白い軽自動車が、閑静な住宅街の中を走行している。

「……へぇー、ここがお父さんの生まれ故郷ってやつかぁ」

運転席に座りハンドルを握る娘の言葉に、助手席の男が苦笑混じりに応える。

「生まれ故郷なんてそんな大袈裟なもんじゃないさ。住んでいたのも小学校三年までの話だ……それにしてもすまなかったな、せっかくの休日にこんな事頼んでしまって」

「いーのよ別に。昔っから毎年毎年お父さんがどこ行ってるのか気になってたしね」

「今年も出来れば一人で来たかったんだがこの身体じゃ流石にきつくてな……おっと、そこの角を左だ」

「え！？　ちょっ……！」

突然の指示に驚いてブレーキペダルを強く踏み込んだために、二人の身体が大きく前につんのめる。

幸いな事に後続車もおらず、事故には至らなかった。

「……お父さん？」

ハンドルにもたれかかった姿勢のまま、娘が男をじろりと睨みつ

ける。

「い、いやすまんすまん。次からは気をつけるよ」

「頼むわよホント……いっつもお母さんは大丈夫だなんて言ってたけど、私達不安だったんだから。お父さんが浮気してんじゃないかーって」

「はは、私は子供達にゃ信用無かったんだな」

「そうよ全く……それよりも身体の方は大丈夫？」

「あぁ、大丈夫だ……そこの十字路を左に曲がればすぐそこだ」

男は娘の手を借りながら車から降り、車止めの隙間を通って園内に足を踏み入れた。

杖をつきながら、何かをかみ締めるように、ゆっくりとした足取りで歩を進めていく。

何度も重ね塗りされたペンキの剥げた箇所から、赤茶けた錆を覗かせる遊具達。

子供が忘れていったのか、プラスチック製のスコップが刺さったままになった小さな砂場。

色とりどりの花が咲き誇る花壇に囲まれた公園は、幼い頃の思い出より、幾分か小さくなっているような錯覚を覚えさせる。

約束の場所は、男が初めて足を踏み入れた時と変わらぬ姿のまま、存在していた。

しかし。

「誰も……いないわね」

そう、夕暮れの公園内には男とその娘以外、誰もいなかった。

「……」

「お父さん？」

「悪いが……しばらく一人にさせてもらってもいいか？」

「え？　あ……うん、じゃ、じゃあ少しその辺ドライブしてくるから」

「すまんな」

娘は戸惑いながらも車へ戻っていった。

車の排気音も聞こえなくなり、男は公園に一人きりになった

「……よっこら……せ、と」

いつも女と話していたベンチに腰掛け、夕暮れの空を見上げる。

「いい娘さんだね？」

いつの間にか男の隣には、約束を交わした頃の姿の「少女」が、足をぶらぶらとさせながら腰掛けていた。

男は別に驚いた様子もなく、視線を少女へと移し、微笑を浮かべる。

「ああ、何てったって私の……いや、俺の自慢の娘だからな」

「そっか」

少女も微笑を浮かべる。

「……迎えに、来てくれたのか」

「うん」

「……そうか」

ポツリと呟き、男は視線を再び上に向ける。

「……ごめんな」

数秒の沈黙の後、男が口を開いた。

視線は上に向けたままだ。

「何が？」

少女は男の方を見る。

「いや、ずいぶん待たせちまったからよ」

「ううん、私が言い出した事だもん。それに毎年会ってたから全然寂しくなかった」

「それならよかった」

「うん……ねぇ？」

「ん？」

「今、幸せ？」

男は目を閉じる。

瞼の裏に浮かんでくるのは、今まで自分が関わってきた人間の顔。

そしてその人達とこれまで育んできた沢山の思い出達。

男は目を開く。

そして静かに、自信に満ちた声で答えた。

「……ああ、俺ぁ本当に幸せだ」

娘が公園に戻ってきたのは、三十分ほど経ってからの事だった。

辺りを見回すまでもなく、男の姿は見付かった。

男はベンチに腰掛け、うたた寝でもしているのか、俯いた姿勢のまま動かない。

娘はため息を吐き、軽く肩を揺する。

「ちょっとお父さん、こんなトコで寝てたら風邪ひくわよ？　……お父さん？」

男の身体は、糸の切れた人形のようにその場に倒れた。

その顔には微笑みが浮かんでいた。

#5（後書き）

読み終えての感想、いただけたら嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8072a/

かつて交わした約束と

2010年10月21日22時20分発行